

三、万人の政治

われわれが、人を批評する場合に、もし聖人君子の行蔵を判定の基準にするとしたら、大抵の人が落第生になり、その批評自体があまり意味のないものになってしまうだろう。だからわれわれは、暗黙のうちに、ある相対的な物差しを用意しておいて、この人はいいか悪いか、親切であるとか不親切であるとか、誠実であるとか不誠実であるとかという具合に、一応の割り切り方をしておるのだと思う。

ところが、こと政治の批評となると、ともすれば、現実の物差しから離れて、厳しいものになってくるように思われるのは、私だけの思い過こしであろうか。つまり、われわれは神でもなければ獣でもなく人間である。この世の中は極楽浄土でも地獄でもなく、娑婆である。そうであるのに、いきなり天国を物差しにして、「政治は腐敗してある」、「政治家不信は限度に来ておる」、「経済や科学は進んだが独り政治がおくれておる」、「そういったことが決まり文句のように飛び出

してくる。そしてそれを当たり前のことのように思つて、深く考えようとはしない。私は自分が政界に身をおいておるせいか、そういう風潮に対し、ある種の抵抗を覚えるのである。

先日私は、石原慎太郎君の当選祝賀会に招かれた。会場には「石原君に注文する会」という横書の大きいピラが掲示されてあつた。財界の重鎮と目される人々が次々に立つて、石原君に注文された。ところがその人達は私を見ながら、「大平さんには悪いけれども、自民党はもつともつとしっかりしてもらわなければならない。何といつても政治が一番おくれである。国民の信頼と尊敬を失つておる。石原君の若さとエネルギーに加うるに、その高邁なフィロソフィーを以て、政界を刷新してもらわなければならない。」という意味の発言をされた。浮かぬ顔をしておつた私に司会者が発言の機会を与えてくれたので、私は次のようなことを申し上げた。

先程からお話を聞いておつて、私の胸中にある種の抵抗が湧いてくるのを抑えきれない思ひです。英国に「よき新聞あるところによき政治がある」という諺があります。しかし私をして敢えていわしむれば、「よき国民あるところによき政治がある」のだと思います。石原君は政治は万人のものであるといつております。これは凡ての人が政治に参加すべきであるという意味だと思ひます。しかし、私は凡ての人が現に政治に参加しておると思ひます。石原君もこれまで、日常

一市民として、一作家として、既に優れた政治をその立場で実践されてきたと思います。皆様もまた実業人という立場で、現に政治を实践されておられると思います。一つ一つの家庭や企業の在り方が、そのままその国の政治のよし悪しを決めるものであります。それら一つ一つが立派にならなければ日本と日本の政治は立派にならないからです。いわば政治は、国民全体の一大オーケストラのようなものであります。それぞれの楽器の音色が合唱の中にはいり込み、調和のとれたリズムと重量感を生産するようになれば、それがそのまま立派な政治になるのだと思います。

皆様は、態々、政治というものを議会という「特殊の世界」の中に押し込んでしまつて、政治家というレッテルを貼られた人々の実践や、演出だけを政治であるかのように心得ておられるように思います。それは誤りだと思ひます。政治は万人のものであるからです。また「お前は劣等生だ」と何度も何度もいわれると、その劣等生はいつしか本物の劣等生になりかねないと思ひます。だから政治家に対する自分達の理解は果たして十分か、政治家のやり口をその立場に立つて考へてみることを怠つてはいないか、政治家に対する協力が欠けるところがないか等について考へて頂きたいと思つてあります。そして皆様もそれぞれの立場で、政治に参加し、政治を实践しておるのだと思ひ直していただきたいのです。われわれもまた、職業的政治家として、貴方方実業人に対する自分達の理解や協力が欠けるところがないかと考へて行かねばならないと思ひま

す。かくして、政治をして、全国民の壮大なオーケストラにしようではありませんか。

古来、政治は「まつりこと」だといわれてきました。そうだとすれば、それは議会という特殊な世界の垣根を超えた国民全体の祭典でなければならぬ筈です。石原君は、既にその祭典に参加して、人の感動を惹く立派な作品をものされてきました。これからは、参議院においても、個人的な仕事をしてくれるものと信じます。私は石原君に皆様と共に大きい期待をもっております。これは、石原君がこれから政治を始めるのだという意味ではありません。ただ石原君の演出の舞台に、自民党とか参議院とかいうところが追加されたにすぎないと考えるものです。石原君は心を平らにして、昨日までのように、これからもやって行かれればよいわけです。三百万の得票をものにされた石原君の今度の選挙運動自体が、既に大きい政治であつたと思います。これから石原君は街頭や工場で、野辺や海浜で多くの人々と対話されることでしょう。またその雄筆を縦横にふるわれることでしょう。それは、これまでのようにこれからも石原君にとって貴い実践であり、漸く芽を出してきた日本の新しいナショナルリズムに光と構図をもたらし、日本のオーケストラに気品を与えてくれるにちがいないと思います。別につま先を立てたり、無理をしないで、淡々とやってもらいたいものだと思います。

(昭、四三・八・一「又信」)